



榎本武揚報文拔萃

3689



114  
A 4034



總論

著名ナル者ハ曰ク久遠曰ク岩内曰ク増毛曰ク厚岸  
 曰ク釧路曰ク浦川等ニメ而シテ其間採ニ從事スルモ  
 ノハ僅ニ岩内釧路ノ二山ニ過キス就裡釧路ハ今既  
 ニ發山トナレリ豈ニ獨リ岩内ハ他ノ諸山ニ愈ヘル  
 ヲ以テノ故カ抑モ亦未タ之ニ注意スル者鮮ク研究  
 スルモノ稀ニメ以テ今日ニ至レルナル歟夫レ石炭  
 ハ礦物中ノ魁ニシテ百般ノ工業製作ヨリ民生日用  
 ノ需ニ至ル迄概皆之ニ頼ラザルヲ得ズ推メ之ノ言  
 ハ人知開化ノ度民生貧富ノ機モ之ニ關スルモノ  
 大ナルヲ以テ國ノ石炭ヲ産スル多キハ實ニ其民ノ  
 幸福ト謂ヘシ雖然其ノ之ヲ大ニ開採メ以テ民生ノ

大正十一年四月  
大隈侯爵郵寄贈

開採

資ニ供セント欲スルニ方テハ次ノ三事ニ首目セザ  
ルヲ得ズ一ニ曰ク運輸ニ。二曰ク品位三ニ曰ク分量  
而ノ運輸ヲ以テ最トス蓋シ運輸便ナラザレハ品位  
良ト雖モ分量多シト雖モ膏ニ大益ヲ具ス能ハザル  
而已ナラズ甚シキニ至ラハ所得不足償所失モノア  
リ茅ノ潤石炭山ノ如キハ海岸ヲ距ル直路三十丁ニ  
過ギス故ニ之ヲ山元ヨリ海岸ニ輸出スルハ便ニ非  
ズト謂フベカラズ然レモ其岸絶テ大船ヲ近クバカ  
ラザルヲ以テ秋夏二季間好風日ヲトスルニ在ラザ  
ルヨリハ大船ヲ寄セ舢舨ヲ以テ積取ル能ハズ其餘  
ハ都テ舢舨ヲ以テ之ヲ「ニヤツナイ」ニ致シ夫ヨリ轉  
メ各方ニ運セザルヲ得ズ乃チ「ニヤツト井」ト雖モ其  
港口暗礁散布シ加ルニ港内極テ狭キヲ以テ絶テ良

港ニ非ズ是一大不便ト可謂フ其品位ヲ論ズルキハ  
現今採出スル所ノ物ハ所謂汽炭ノ類ル可ナル者也  
ト雖モ概メ之ヲ言キハ高島岩津ニ不及然モ亦之ヲ  
盤城ノ石炭ニ比スレバ遙ニ其上ニ駕セリ其分量ニ  
至テハ極テ多キト前文記スル所ノ如シ彼ヲ以テ此  
ニ計リ其短長ヲ取捨スルキハ此地ノ石炭ヲ開採ス  
ルニ數十万ノ金ヲ出シ以テ一大造築ヲ興ナントス  
ルハ策ノ得メルモノニ非ズ然レモ之ヲ察棄メ顧ミ  
ザルハ又策ノ尤モ拙キ者トス我ヲ以テ之ヲ見レバ  
今此山ニ新ニ四五万圓ノ本銀ヲ費シ以テ現今足ラ  
ザル所ノモノヲ補ヒ以テ其一二ノ開採方法ヲ變ス  
ル丁一ニ前文記スル所ノ如クナラシメバ特ニ此地  
繁榮ノ基トナルノミナラズ抑モ亦之ヲ開採スル者

相當ノ利益ヲ得ルハ必然之ヲ保スベシ雖然今假シ  
此地ノ近隣新々ニ石炭ヲ見出し其運輸其品位分量  
此ニ愈ルモノアルキハ此ニ遂ニ彼レニ抗スル能ハ  
ズメ其勢衰微スルニ至ルハ亦必然ノ理ナリトス予  
ノ札幌府ニ在ルヤ入アリ一塊ノ石炭大ナク尺有餘ノ  
者數個ヲ持シ未テ予ニ謂テ曰ク是レ石狩河上ト子  
ペツレニ産スル所ニメ今年夏某々等ノ見出セル所ニ  
係ルト云々予悅テ之ヲ見ルニ一月ノ下既ニ其岩内  
石炭ニ愈ルヲ知ル目テ又之ヲ分析メ其品位ヲ見  
ルニ直ニ高島ニ並ヒ駕ノ唐津ニ愈ルヲ確知セ  
リ予於是テ其人ヲ招キ身親ラ之ヲ尋問スルニ其地  
位其分量共ニ畧下文記スル所ノ如シ此言ヲレテ果  
メ信ナラシメバ岩内石炭山ヲメ衰微セシムルニ足

ヘリ何トナレハ其地石狩枝流ノ左岸ニ位スルヲ以  
テ其採出セル石炭ハ船ヲ以テ直ニ之ヲ札幌ニ致  
シ得バク又之ヲレテ石狩河口ニ送り轉メ小樽港ニ  
貯蓄シ得バク今若シ其地ヲ實測メ山川ノ方向ヲ熟  
知セハ陸輸ノ使却テ河運ニ愈ル丁アルモ知ルベカ  
由是言之前ニ所謂小造塔ナル者モ亦此地ヲ檢  
査メ其損益得失ヲ比較シ而後之レニ從事スベキヲ  
以テ至當トス或曰クモレト子ベツテ其三網悉  
ク岩内ニ卓越スルキハ岩内ハ遂ニ棄テ觀ミザルベ  
キカ曰ク否不然之ヲ以テ藻岩ノ銅鉛坑<sub>ト申</sub>採<sub>ト申</sub>出<sub>ト申</sub>間  
採ノ用ニ供スルキハ其地僅ニ三里ニ過ギザルヲ以  
テ石狩石炭ヲ用フルヨ。大益アリ又之ヲ以テ海ヲ  
煮ルバク又之ヲ以テ近傍地方百種ノ用ニ供スベシ

悪シゾ能ク如是天福ヲ地ヲ棄テ其民利ヲ空フスル  
者アラニヤ唯其之ヲ開採スルモノハ素ヨリ官私ヲ  
問ハザル而已

石狩河枝流トネベツ河岸石炭山

紀間附見平圖

一明治五年夏六月札幌寄留ノ一民早川長十郎ナル者  
石狩河上石炭ヲ産スルノ風説ヲ聞キ人夫三四名ヲ  
拉シ札幌ヲ發シテツイシカリ一泊(陸路五里)同所  
九木船ヲ就ヒ流ニ湖ル丁約三里ニメ「ホリモイ」  
ト名クル一技流ニ入り行ク丁一里半許ニメ左ニ折  
レテ「イクレベツ」河ニ入りタリ「イクレベツ」河ハ幅負  
六間ヨリ十間ニ至リ深サ三四尺乃至八九尺流緩ニ  
メ流木多シト云フ此河ヲ上ル丁略七八里許ニメ右  
岸ニ「ト子ベツ」ト名クル一小河アリ長十郎此處ニア  
ル土人ノ熊小屋ニ一泊シ翼日此一小河ノ流出ル澤  
ニ傍テ西ニ向テ進ム丁十五六丁計ニメ左方ノ山次

第一 相接シテ遂ニ隘キ一小溪流ヲ為ス此溪底處ニ  
ニ石炭脈現出シ又左右岸ヲ仰視スルニ數條ノ石炭  
脈山腹ニ横直シ其脈ノ厚サ五六尺乃至十七八尺上  
石ヲ以テ相界シテ又々現出スル丁恰モ數條ノ帶ヲ  
山ニ結ベルガ如シト云フ

一 長十部ハ此石炭脈ノ現出セシ處ヨリ猶此溪ニ分ケ  
入ル丁半里餘ニ至ルト雖モ西岸依然石炭ヲ見ルノ  
メ更ニ變形ナク岸ノ高サハ十丈ヨリ十五六丈  
ナルベク而メ其頂皆樹木ヲ載ケリ

一 イクレベツ河ヲ溯リテト子ベツニ至ル七八里ノ間  
左岸ハ無盡ノ郊野ニメ右岸ハ若干距離ヲ隔テ小山  
ヲミルノミ其漸クト子ベツニ近クニ從テ右岸ハ山  
ニ接込スト雖モ岸直キニ山ヲ為スノ處ナシト云フ

一 此邊ハ往々樵夫炭燒等ノ往來スル所ニメ長十部之  
ヲ一ノ山子ニ聞クニ「ト子ベツノ澤ニ入ラズメ「イ  
レベツ」ヲ進ム」猶一里餘ニ至ルキハ之ヨリモ大ナ  
ル石炭山アリト云々長十部ハ糧ヲ欠キレテ以テ遂  
ニ探討セズメ歸來レリト云フ

一 昔年驅役セシ一水夫亦札幌ニ在リテ長十部ニ  
從ヒ此地ニ至リシヲ以テ之ヲ紀スニ其言皆大同小  
異タリ然レモ此輩大抵皆好事牟利ノ徒ニメ絶テ識  
見ニ乏キヲ以テ其言悉ク信ズベカラズ唯其此山ヲ  
開採センガ為ニ其持歸リシ石ニ疎圖一枚ヲ添テ官  
廳ニ願出セシ書アルヲ見レバ素ヨリ無根ノ説ニア  
ラズメ其採來リシ品モ亦真品ナルニ似タリ

石狩子ベツト石炭品位試驗表

一 比重	一二四三
一 水分	百分ノ四
一 可燃揮発物	百分ノ四十
一 固形炭素	百分ノ五十一八
一 灰	百分ノ四二
一 「ゴークス」	百分ノ五十六
一 硫黄	千分ノ四一

